

# ツィンメルワルト運動の成立

## ——ツィンメルワルト会議の内容と結果——(1)

黒 沼 凱 夫

### はじめに

1914年8月、第一次世界大戦の勃発を契機として、ヨーロッパの社会主義運動は、第二インタナショナルの崩壊といわれる深刻な危機にみまわれた。世界大戦に先立つ時期の第二インタナショナルは、1907年のシュトゥットガルト大会以来、数次にわたる大会・臨時大会において、繰り返し戦争反対の態度を表明し、迫りつつある戦争の帝国主義的性格を指摘するとともに、戦争が勃発した際の社会主義者の反戦行動の任務についても明確な指針をあたえていた。しかし、戦争が事実となったとき、インタナショナルの指導党と目されたドイツ社会民主党を始めとして、交戦国の社会主義諸党は、自国の戦争を防衛戦争と規定し、戦費に賛成票を投じ、戦争内閣に指導者を送り込むなど、相次いで戦争協力の立場にまわった。こうして各国において、社会主義勢力を含めた「城内平和」「神聖連合」と呼ばれる挙国一致の戦争遂行体制が成立し、インタナショナルは、開戦後数日のうちに事実上消滅してしまったのである。

本稿でとりあげたツィンメルワルト運動は、この中であって、開戦2年目を迎えた1915年に、参戦しなかったスイスの社会主義者を中心に、戦争中も戦前のインタナショナル決議の精神に立脚し、自国政府の戦争政策とそれに協力した諸党指導部の城内平和政策に抵抗しようとした社会主義者たちによって組織された。彼らは、この年の9月に、スイスのベルン近郊の小村ツィンメルワルトで国際会議をもち、世界大戦をいずれの側から見ても帝国主義戦争であると非難し、階級闘争の

原則にもとづく国際的反戦行動の再開を呼びかけ、各国にそれをひろめた。アルプス山地の小さな保養地にすぎなかったツィンメルワルトの名は、爾来、大戦下における社会主義的反戦運動の合言葉として世界中に知れわたることになった。

筆者は、拙稿「第一次世界大戦下の社会主義運動 — ツィンメルワルト運動の成立史によせて —」<sup>1)</sup>において、この運動の発起者であったスイスとイタリアの社会主義者の活動に焦点をあわせて、ツィンメルワルト会議の成立経緯を検討した。この稿では、この会議の議事録<sup>2)</sup>にそくして、会議における討議の模様とその諸結果を検討し、成立時におけるツィンメルワルト運動の性格を分析することにした。

### 〔1〕

1915年9月5日、日曜日の午後、ベルンから4台の馬車に分乗してアルプスの山路を登ってきた一行が、ツィンメルワルトのペンション《ボーセジュール Beau-Séjour》に到着した<sup>3)</sup>。一行は、鳥の生態に関する学術調査団と称していたが、それは官憲と報道機関の目を逃れる口実であり、彼らは、戦争に協力した第二インタナショナルの指導者たちの意向に逆い、戦時下の国境を越え、各国の社会主義運動内の戦争反対派の国際会議を開くために集った11カ国38名の社会主義者たちであった<sup>4)</sup>。

会議は、その日の午後4時、《ボーセジュール》の別館《ヴィラ Villa》に会場をとり<sup>5)</sup>、スイス社

会民主党員ローベルト・グリムの司会で始まった。会議の発起者たちを代表して、グリムは会議の目的と課題を次のように規定した。「会議は戦時においてもインタナショナルが生き続けていることを実証しなければならない。会議の目的は、平和のための闘争によって、大衆を社会主義の側に再獲得することである。」「会議は、決して新しいインタナショナルの形成に寄与するものであってはならない。会議の課題はむしろ、プロレタリアートに共同の平和行動を呼びかけること、このために行動の中心を作ること、そして労働者階級をその歴史的使命に連れ戻す試みを行うことである。」<sup>6)</sup>

議事日程は、グリムの提案にもとづき、以下の10項目が確認された。1) 事務局選出、2) 代表権審査、3) 通知、4) 票決権の配分、5) 議事規則の制定、6) 各国からの状況報告、7) プロレタリアートの平和行動、8) 行動の中心の設立、9) 資金調達、10) その他<sup>7)</sup>。

事務局は、同権の議長3名、書記2名によって構成された。議長団には、グリム、C.ラッザーリ(イタリア)、Ch.ラコフスキー(ルーマニア)の3名が、書記には、A.バラバーノフ(イタリア)とH.ローラント・ホルスト(オランダ)が選出された<sup>8)</sup>。

代表権審査の問題では、ドイツ代表团から、『リヒトシュトラレーン』派のJ.ボルハルトの代表権に異議が提出された。G.レーデブーアは、ボルハルトをドイツ代表团の一員と認めることはできない、「ボルハルトが参加するなら、われわれは去る」と強硬な態度を示した。若干のやりとりの後、この問題の審議は事務局に委ねられることになったが、会議終了まで事務局が審議の機会を持つことができなかったため、決着はつけられなかった。最終的には、会議はボルハルトがドイツ代表の1人として参加したことを認めるが、ドイツ代表团はそれを無視するという妥協策がとられた<sup>9)</sup>。

各国からの報告に先立ち、会議に寄せられたカール・リープクネヒトの手紙が朗読され、熱狂的に迎えられた。リープクネヒトは、このとき、作業兵として召集され、東部戦線に送られていた。手紙は彼の妻ゾフィーによってスイスに持ち込まれ、今しがたグリムの手許に届いたばかりであっ

た<sup>10)</sup>。それは次の言葉で始まっていた。「私は軍国主義の囚われの身となり、鎖につながれている。そのため、私は諸君のところへ行くことができない。にもかかわらず、私の心、私の頭脳、私の魂のすべては諸君のもとにある。」それは、会議への熱烈な連帯の挨拶であるとともに、交戦国諸党の社会愛国主義と城内平和政策にたいする決然たる闘争の呼びかけであった。「ドイツ、イギリス、フランスその他におけるインタナショナルの敵前逃亡者、投降者を仮借なく断罪すること。」「すべての国にたいして！城内平和(Burgfrieden)ではなく、城内戦争(Burgkrieg)！」すなわち「えせ愛国主義的な階級協調」に「プロレタリアートの国際連帯」を、「国家間の戦争」に「国際的な階級闘争、平和のための、社会主義革命のための国際的な階級闘争」を対置すること。なかんずく、ドイツとフランスの社会主義者の共同行動が重要である。フランスの同志は、「国民的団結という巧言だけでなく、これと同様に危険な党の団結という巧言にも囚われないでほしい。」「新しいインタナショナルは、ただ古いインタナショナルの廃墟の上にのみ、新たないっそう堅固な土台をもって生起しうる」であろう。「にせ社会主義者を断固として裁け。すべての国の、とくにドイツの、動揺し、ためらう者たちを容赦なくむち打て。」<sup>11)</sup>

エルンスト・マイヤーは、この手紙が朗読されたときの会議の様子について、次のような証言を残している。手紙の朗読は、出席者たちの「巨大な拍手の嵐をまきおこした。」しかし、ドイツ代表レーデブーアとホフマンは例外であった。「彼らは、理由のないことではなかったが、感情を害し、『独善主義』だとささやきあった。」レーニンも、とくに「城内平和ではなく城内戦争！」という箇所が気に入る、「『城内戦争—これはすばらしい』と何度もこの句を繰り返した。」<sup>12)</sup>

各国からの報告は、イタリア、フランス、ドイツ、ロシアの順で行なわれることになった。その際、複数の党派が存在したロシアとドイツの代表团は、「議事を短縮する」ために、演説者を1人にしぼることを要請された<sup>13)</sup>。ポーランドの3つの社会主義組織のあいだでは、会議前に共同行動に

ついでに諒解が成立していた<sup>14)</sup>。

イタリア社会党を代表して報告に立ったラッザーリは、会議の課題を、50年前の第一インタナショナルの創立時になぞらえ、次のように述べた。「今日の会議は困難な課題に直面している。国際的なプロレタリアの平和運動は、全世界のプロレタリアのなかに社会主義の解放使命にたいする信念が喚起され、強化されるように導かれなければならない。」「決して諸党を裁くのではなく、」「平和と社会主義のための闘争」を提起することによって、「労働者階級の将来の闘争を準備すること」が重要である<sup>15)</sup>。

各国からの報告のクライマックスは、フランス代表とドイツ代表の演説であった。CGT（労働総同盟）少数派を代表する A. メランは、フランスとドイツの少数派の共同行動の重要性を強調し、ドイツ反対派の明確な反戦行動を要求した。「占領地の解放を条件とする無併合の講和を強制することが問題である。これは、しかし、両国におけるプロレタリアの階級闘争によってのみ達成される。」「フランスでの平和運動にドイツでのそれが並行して行なわれなければならない。」「最も重要なのはドイツの反対派の行動である。ドイツの反対派が、例えば、戦時公債に反対投票していたなら、フランスの少数派の立場はもっと強くなっていただろう。私は、ドイツに共同行動を惹き起こすためには、フランスにおける行動が不可欠であるとたえず主張してきた。しかし、その逆もまた真である。フランスでは人は平和を望んでおり、併合を恐れているだけである。ドイツの反対派はもっと声高く併合に反対すべきである。われわれはこの抗議の声を必要としている。われわれの事業を共同でなし遂げるために、われわれにこの声を聞かせよ。」もう一人のフランス代表 A. ブールドロンは、メランの発言を補足して、ドイツの反対派との協力の問題が、フランスにおける党内闘争の主要争点のひとつになっていることを明らかにした。「（フランスの）少数派は、ドイツの少数派と接触することを強硬に主張している。（これにたいして）多数派は、関係再開の条件として、ドイツの少数派が多数派になること、関係再開を

可能にする状況が作り出されることを要求している。」<sup>16)</sup>

これをうけてドイツから報告に立ったのは、戦時公債問題ではリープクネヒトと行動を共にせず、カウツキー、ハーゼら中央派とともに投票を棄権する立場をとっていたレーデブーアであった。彼の報告は、メランの批判と要求にたいする釈明の性格を帯びた。しかし、その釈明は少なからぬ出席者たちの不満と抗議を呼び起し、そのため、レーデブーアは、幾度も演説を中断せざるをえなかった。彼は、共同行動についてのメランの発言に賛意を表明したが、併合反対の声をあげよという要求にたいしては、それは党の分裂なしには不可能であると応え、レーデブーアら党内反対派の行動の弁明に終始した。8月4日のドイツ社会民主党議員団の戦時公債承認について、彼は、次のように釈明している。「ドイツでは、同志たちは戦争に不意を襲われた。」党幹部会と議員団の合同会議では、当初は公債拒否が支配的気分だったが、シャイデマンとハーゼが政府代表と談合をもった後に、状況が一変した。「少数派は、分派行動によって党に損害をあたえることを欲しなかったが故に、多数派に屈服した。」ハーゼが帝国議会で議員団の公債承認声明を朗読したのもこの理由からであった。パリに派遣されたミュラーの、フランスでは公債は承認されるだろうという報告は、「ドイツ少数派の立場を困難にした。」少数派は議員団声明の作成に関与しなかった。このためベルギーの問題は言及されなかった。「帝国宰相が中立侵犯について述べたとき——それまで人は何も知らされていなかった——議員団の声明はすでに政府に提出されたあとであった。」——レーデブーアは、トロツキー、「スイスの同志」、レーニンらの批判の声、「多数の罵詈雑言」にたいし、次のように応酬している。「少数派は、新議員団を作るのでなければ、議会でその声をあげることは不可能である。それは、しかし、党を二つに割らないために回避されている。戦時には大衆にたいする影響力を失わないために一致団結していることがとりわけ重要である。」「リープクネヒトの行動は、ある点では有利に作用した」が、「党の統一と

反対派の統一にたいする考慮」を欠いている。「われわれは分裂なしの闘争を望んだ。」それは「偉大な運動の開始を考慮する」からである。さらに、レーデブーアは、「われわれが正しかったことは、結果、すなわち反対派の増大が証明した」、「ベルリンでは同志の10分の9が反対派の側に立っており、幹部のあいだでもそうである」、「今や議会の外でも闘争が行なわれている」、「もし言論がかくも抑圧されていなければ、ドイツではすでに少数派が多数派になっていただろう」、「時間さえあれば全党はわれわれの側につく」として、ドイツ反対派の増大とその活動の強化を強調し、「今や主要な問題は、フランスの反対派との諒解と共同行動である」、「過去について非難することではなく、行動することが重要である」とその発言を結んだ<sup>17)</sup>。

これにたいして、『インテルナツィオナーレ』派のB. タールハイマーが、リープクネヒトを擁護して発言した。「同志レーデブーアは、ここで全反対派を代表しているわけではない。少数派のなかには、リープクネヒトのまわりに結集し、彼が(党)規律よりも原則に重きを置いたことを支持する少数派がいる。」<sup>18)</sup>

議長グリムは、これをうけて、「ドイツ反対派の同志にもう1人発言権をあたえる」ことを提案した。しかし、A. ホフマン、ヘルツフェルト、E. フォクトヘルが、「リープクネヒト派なるものは存在しない」、「戦術上の相違が問題になっているだけである」として、ドイツ反対派の統一を主張した。結局、追加演説者には、レーデブーア報告にたいする補足としてのみ発言権があたえられることになった。『インテルナツィオナーレ』派のタールハイマーとマイヤーは、独自のグループとしての発言権を要求しなかった<sup>19)</sup>。

この日の会議は、これをもって午後11時に終り、残りの報告は翌日に持ち越された。

## [2]

翌9月6日の議事は午前9時に開始された。

各国からの報告を再開する前に、票決権の配分について、長時間におよぶ議論がなされた。問題になったのは、各国1票を原則とするか、それとも各国の代表団内部の意見の相違が反映されるようにするか、また、大国と小国のあいだに差をもうけるかどうかということであった。ラッザーリは、「各代表団は『戦争反対』で一致できる」として、またホフマンは、「会議の目的は反戦行動である」として、ともに各国1票を主張し、ブルドゥロン、V. チェルノフがこれに賛成した。これにたいして、P. アクセリロートは、「会議の目的に関して2つの傾向が存在する」として、各国2票をとえ、K. ラーデクは、「票数を多くしても一致の可能性は排除されない」として、大国10票、小国6票を提案した。また、レーニン、大国10票、小国5票を、ボルハルトは、各代表1票を提案した。事務局からは、各国5票が提案され、トロツキーとモジリアーニがこれを支持した。結局、ラッザーリ提案と事務局提案のあいだで票決がなされ、7対18で、後者が採択された<sup>20)</sup>。

各国からの報告の再開に際し、ドイツ反対派のもう1人の報告者として立ったのはホフマンであった。彼は、いわばレーデブーアとリープクネヒトの中間に立って、ドイツ反対派の行動を釈明した。彼の演説は、8月4日の公債承認の卒直な自己批判から始まった。「レーデブーアは、われわれは全く不意を襲われたと述べたが、私は、これに異議をとえぬ。むしろ、大衆が議員団の投票によって頭を打たれたのである。」ツァーリズムの軍隊の侵入にたいする恐怖に囚われた国民の前で、公債を拒否するのはたしかに容易ではなかった。「人は、住民が激怒するのを恐れた。」しかし「原則が破壊されるよりは、人民の家が破壊される方がましだ、と私は言おう。」「戦争反対の国民運動で生じる犠牲は、戦争そのものが要求した犠牲に比すればとるにたぬものだったろう。もしドイツの帝国議会議員団が開戦当初ただちに公債を拒否していたら、フランスで政府参加が生じることも多分なかっただろうし、また、当初は公債が承認されたとしても長続きはしなかっただろう。イタリアの同志がそうしたように、われわれ

も不愉快な結果を引き受けるべきであった。」また、ホフマンは、リープクネヒトの行動については、「人は、何よりも議員団多数派と公然と分裂することを避けたがっており、議員団の分裂はまだ党の分裂を意味しないことを忘れている」として、レーデブーアを批判するとともに、他方で、党の統一を保持し、その枠内で多数派形成をめざす立場から、戦術的考慮の必要性を強調した。「反対派の大多数は、リープクネヒトと完全に一致している。」彼らは「ただ時機が適当でない」と考えているだけである。「リープクネヒトは、彼らと諒解をとりさえすればよかったのである。彼がそうしていたら、第4回目の戦時公債が持ち込まれたとき、それを拒否した者の数ははるかに多くなっていただろう。」「ドイツでは、大衆が急進的なので、分裂をめざすべきではない。」「われわれの背後には大衆の多数派がいる。」次の党大会が、講和の締結後、兵士たちの帰還を待って開催されるなら、このことが証明されるだろう。そして、有給の党官僚たちが党大会を牛耳るのを防ぐことができれば、われわれは勝利するだろう<sup>21)</sup>。

ホフマンの演説は、レーデブーアの場合とは対照的に、賛同の声と拍手で迎えられた。しかし、ドイツ代表への不満がこれで解消したわけではなかった。ホフマンは、戦時公債拒否投票の用意があることを示唆した。しかし、それを明言しなかった。このあと報告に立った各国の代表たちは、ドイツ社会民主党議員団の戦時公債承認が巨大な衝撃であったこと、そしてそれが各国の運動にいかんに深刻な影響を及ぼしているかを異口同音に繰り返している<sup>22)</sup>。そして、会議の3日目と4日目に、会議が発すべき宣言に戦時公債拒否を盛り込むことが問題になったとき、ドイツ代表にたいする批判は新たな規模と激しさをもって再燃することになる。

ロシアからはメンシェヴィキ（ロシア社会民主労働党組織委員会派）のアクセリロートが長い報告を行なった。彼は、ロシアの「国際主義的多数派」内の「意見の相違」に触れた際に、「会議の目的と課題」についての意見の相違は「2つの傾向」に集約されることを強調した。「若干の代表は、こ

の会議で『新しい』インターナショナルの組織的土台を固め……ようとしている。他方、参加者の他の部分は、何よりもまず戦争の継続に反対し、平和を擁護する効果的な国際的闘争を開始し、その先頭に立つために、この会議を社会主義的プロレタリアートの国際的な意志疎通の出発点にしようと考えている。」アクセリロートは、組織委員会派が「会議の参加者の多数派」とともに後者の見地に立つ理由を次のように述べた。「インタナショナルの再建は、今日明日のうちに、このような会議で決定できることではない。インタナショナルの早急な再建と復活に必要な前提は、まさにプロレタリア諸党の共同の平和行動のための国際的諒解によって始めて作り出すことができる。」「インタナショナルの再生の過程……は、十中八九激烈な内的党派闘争と、多数の分子の分離のもとで進行するとしても、それでもなお、大きな分裂と後遺症を伴うものであってはならない。」「国際主義者たることを標榜する者は、城内平和政策とそれの弁護者にたいする闘争のなかで、……プロレタリアートの解放闘争のこの堡壘を、われわれの過去から未来への遺産として、無傷で保持することに努めなければならない。」<sup>23)</sup>

アクセリロートが、インタナショナルの分裂を企んでいると非難した「若干の代表」とは、いうまでもなくレーニンらボリシェヴィキ（中央委員会派）のことである。ジノヴィエフがこれに反論した。「人は、われわれがあたかも特殊なロシア的戦術を作り上げようとしているかのように言う。それは真実ではない。われわれは、ただマルクス主義的戦術をロシアの土壌に適用しようとしているだけである。……アクセリロートは、ロシアの党の統一が彼の最大の願いであると述べた。われわれもそれを望んでいる。しかし、国際主義の基盤に立ってそれを望んでいるのである。われわれは、社会愛国主義者とともに闘争することはできない。われわれの誰もイタリア人にたいして、ビソラーティとともに党を作れとは言わない。それ故、われわれにたいしてもそういうことを求めるべきではない。」<sup>24)</sup>

続いて、ヴィンター（ラトヴィア社会民主党）、

チェルノフ(社会革命党=エス・エル),トロツキーらのロシア代表が発言した後,イギリスの労働者党<sup>25)</sup>について報告したO.モルガーリ(イタリア社会党)の発言から,会議に先立って,ベルンでカウツキー,ベルンシュタインとルノーデル,ジュオーの会談<sup>26)</sup>が秘密裡に行なわれたことが明らかになり,これについての意見交換がなされた。グリムは,これは「統一運動の主導権を急進的少数派の手から奪い取ろうとする企みである」として,カウツキー,ハーゼ,ベルンシュタインにたいする不信の念を表明した。これにたいして,レーデブーアは,グリムの危惧は過度のものであると述べた。メランは,この会談について,「彼らは,ドイツ人にたいしては,フランス人は何もすることができないと思わせ,フランス人にたいしては,ドイツ人は全く無力であると思わせようとしているのである」と述べた。<sup>27)</sup>

このあと,各国からの報告は,ポーランド,ルーマニア,ブルガリア,スウェーデンおよびノルウェー,オランダ,スイスの順で行なわれた。

ポーランドからは,ポーランド社会党左派のラビンスキーが報告に立った。彼は,会議に参加したポーランドの3つの社会主義組織を代表して,ポーランド問題に関する共同声明を朗読した。それは,列強,なかんずくロシア,ドイツ,オーストリアによるポーランドの再分割と併合の企図に断固たる抗議の意志を表明するとともに,この問題でのドイツ社会民主党の沈黙を激しく非難していた。また,声明は,現在の戦争はヨーロッパに「軍事的衝突と社会的動揺の一時代」を開き,プロレタリアートの革命的闘争の,国際的規模での展開と資本主義の廃絶をめざす社会主義のための闘争への転化をもたらすだろうという見直しを述べ,ポーランドの真の解放は,この闘争への参加によってのみ実現される,と結んでいた。<sup>28)</sup>

ポーランド代表の非難にたいして,『インテルナツィオナーレ』派のマイヤーは,「ラビンスキーの批判は全く正当である」,「彼に反論する気は毛頭ない」としたうえで,ドイツではポーランド問題についての検閲が著しく強化されていること,併合政策に断固として反対する少数派の小冊子が少

し前に出たことを指摘した。他方,レーデブーアは,ラビンスキーの非難に同意できないとして,彼自身が帝国議会でポーランドにおけるヒンデンブルクの戦争遂行政策の野蛮さを非難して反逆者扱いを受けた事実をあげるとともに,少数派が政府の併合プランに反対の声をあげるには,「新議員団を作る以外にない」,しかし「それは党の分裂をもたらすだろう」として,先のメランにたいするのと同様の弁明を繰り返した。<sup>29)</sup>

この日の会議は,各国からの報告を終えた後,フランス代表団から提出された「ジョレースおよび軍国主義のすべての犠牲者の栄誉を称える」同情決議案を検討し,これに各国からの追加事項を盛り込むことを事務局に委任して,午前零時に閉会した。<sup>30)</sup>

#### 《註》

- 1) 『研究年報経済学』第39巻第1, 2号, 1977年。
- 2) H. Lademacher (hrsg.), Die Zimmerwalder Bewegung, Bd. I, Protokolle, The Hague 1967.
- 3) J. Humbert-Droz, L'origine de l'Internationale communiste de Zimmerwald à Moscou, Neuchâtel 1968, pp. 127-128. W. Gautschi, Lenin als Emigrant in der Schweiz, Zürich 1973, S. 145, S. 155.
- 4) 会議参加者は,以下の通りである。スイス代表; R. グリム, Ch. ネース, F. プラッテン, C. ムーア。ロシア代表; レーニン(ロシア社会民主労働党中央委員会), ジノヴィエフ(同), P. アクセリロート(ロシア社会民主労働党組織委員会), L. マールトフ(同), L. トロツキー(『ナージェ・スローヴォ』派), V. チェルノフ(社会革命党), M. ナタンソン(同), ヴィンター(ラトヴィア社会民主党), レマンスキー(ブント)。ドイツ代表; G. レーデブーア, A. ホフマン, E. フォークトヘル, ヘルツフェルト, M. ラインハルト, H. ベルゲス, G. ラッヘンマイアー, B. タールハイマー(『インテルナツィオナーレ』派), E. マイヤー(同), J. ボルハルト(『リヒトシュトラーレン』派)。ポーランド代表; K. ラーデク(ポーランド-リトアニア王国社会民主党地方指導部), ワルスキー(ポーランド-リトアニア王国社会民主党中央指導部), ラビンスキー(ポーランド社会党左派)。イタリア代表; C. ラッザーリ, A.

- バラバーノフ, G. M.セルラーティ, O.モルガーリ, G. M.モジリアーニ。フランス代表; A.メラン (CGT 少数派), A.ブールドゥロン(同)。ルーマニア代表; Ch.ラコブスキー (ルーマニア社会民主党)。ブルガリア代表; W.コロフ (ブルガリア社会民主党『偏狭派』)。オランダ代表; H.ローラント-ホルスト。スウェーデン-ノルウェー代表; Z.ヘークルント (スウェーデン-ノルウェー社会民主主義青年同盟), T.ネルマン(同)。H. Lademacher, op. cit., S. 45—49.
- 5) W. Gautschi, op. cit., S. 155.  
 6) H. Lademacher, op. cit., S. 52.  
 7) ibid., S. 52—53.  
 8) ibid., S. 53.  
 9) ibid., S. 53—54, S. 131.  
 10) ibid., S. 54—55. O. H. Gankin & H. H. Fisher, *The Bolsheviks and the World War*, Stanford U. P. 1940, p. 326. H. Lademacher (hrsg.), *Die Zimmerwalder Bewegung*, Bd. II, *Korrespondenz*, The Hague 1967, S. 100—101.  
 11) H. Lademacher, op. cit., S. 55—56.  
 12) O. H. Gankin & H. H. Fisher, op. cit., p. 326.  
 13) H. Lademacher, op. cit., S. 57.  
 14) F. Tych, *La Participation des partis ouvriers polonais au mouvement de Zimmerwald*, dans *Annali Istituto Giangiacomo Feltrinelli*, Milan, A. 4, 1961, p. 99.  
 15) H. Lademacher, op. cit., S. 65.  
 16) ibid., S. 71—72.  
 17) ibid., S. 73—80.  
 18) ibid., S. 80.  
 19) ibid., S. 80—81.  
 20) ibid., S. 81—82.  
 21) ibid., S. 82—83.  
 22) vgl. ibid., S. 88—89, S. 93, S. 94, S. 104.  
 23) ibid., S. 89—90.  
 24) ibid., S. 92—93.  
 25) 独立労働党とイギリス社会党の代表は、政府に旅券交付を拒否されたため、会議参加の意図を果たせなかった。ibid., S. 54, S. 96.  
 26) この会談については, A. Blänsdorf, *Die Zweite Internationale und der Krieg*, Stuttgart 1979, S. 181—183.  
 27) H. Lademacher, op. cit., S. 96—98.  
 28) ibid., S. 100—102.  
 29) ibid., S. 103.  
 30) ibid., S. 115.